

日本、この恵まれた国

・ ・ ・ 今も？

奥村 快也 陸自70

ワシントンにあるアーリントン墓

地に行つたことがある。当時、アメリカ陸軍の指揮幕僚大学に留学生として行かせて貰つていた。

指揮幕僚大学ではアメリカの軍人だけの秘密の講義の時には、留学生は研修旅行だった。ワシントン研修

の際に、アーリントン墓地での献花があつた。献花の留学生代表は第2次世界大戦の戦勝国のイギリス、カナダ、オーストラリアであつた。敗戦国たる、日本、ドイツ、イタリア、オーストリアの連中はなんとなく釈然とせずに一塊になり雑談をとつたが、その時の話題が戦争中の指導者のことであつた。当然、ヒトラー、ムッソリーニは敗戦の責任を取る形で自殺し、あるいは虐殺されたが、戦勝国の指導者達もすでに亡くなつていた。ドイツの留学生が、日本の

天皇はその後どうなったのか尋ねてきたので、裕仁天皇はいまだご健在で日本のシンボルとして元首である

旨説明した。その場にいた留学生仲間には信じられないという顔で、それは本当かと異口同音に質問してきた。アメリカに占領された敗戦国の元首がいまだにその地位を維持していることなど、信じられないというわけである。

その時の筆者の心情はかなり複雑なものであつたが、ある種の誇らしさもあつた。

今上陛下の徳仁様は126代目の天皇陛下である。

世界のどこの国でも、建国以来の神話がある。日本の場合は天照大神の神話以来、建国の神武天皇を初代として現在の天皇陛下まで連綿として天皇家が續いている。世界的に見ても唯一の歴史である。神武天皇以来今年は皇紀2681年ということになる。西暦前の紀元前660年が神武天皇即位の年ということになっている。

戦前のように、また森元首相のようにに神の国と言うつもりはないが、極めて恵まれた国であつたのは事実である。

ヨーロッパの同じ島国のイギリスはローマ時代、ジュリアス・シーザーによって占領されている。かろうじ

て、現在のスコットランドはローマの統治を免れているが、その事実をスコットランドとイングランドの間にあるハドリクス・ウォールで偲ぶことが出来る。イギリスは日本に比べれば、ヨーロッパ大陸と近すぎたのである。

よく言われることであるが、日本は大陸から文化は入るくらい距離にあるが、侵攻するには遠すぎる距離にあった。ドーバー海峡が34^キに對して対馬海峡は途中に對馬があるが総距離で200^キである。

日本の朝鮮半島への侵攻は554年の百濟救援の出兵、そして663年の白村江の戦いであり、次いで秀吉の慶長・文祿の役がある。大陸からの日本侵攻は蒙古来襲である。いずれの側からの侵攻も好太王の碑に記された391年の神功皇后の三韓征伐を除いて失敗している。当時は對馬海峡を越えて戦力を維持する力をお互いに持つていなかったのである。

近代になって日清・日露戦争で日本が大陸に進出し、また韓国を併合し、満洲に満洲国を打ち立てた。更に続くシナ事変そして大東亜戦争で日本は連合国に敗れて降伏しアメリカ

カが初めて日本を占領統治した。幸いなことに、アメリカの占領統治においても、天皇制は廃絶されることなく、現在でも日本国民の統合の象徴となつてゐる。

誤解を恐れずに言えば、これは天皇家が優れているわけでもなく、日本人が他の国民と比べて特段優れていたわけでもない。更に言うと、終戦時の日本は国体護持、すなわち天皇制を守ろうとして存亡の淵まで行つたのである。今現在の多くの人々の価値観で言うと、そのことに国家の存亡をかけた当時の人々の考えと異なる考えも生じる時代と言える。

たまたま、それまでは島国である日本の地理的条件が日本を恵まれた平和な国にしていたことは事実である。しかし今は、その地理的優位さがかき消される時代である。

中国や北朝鮮がその気になれば、核弾頭が飛んでくる時代である。当然、それらの国がやみくもに核弾頭を打ち込むことは、現在の国際環境上の蓋然性として可能性は少ない。しかし、ほどほどに大陸から離れた島国としての優位的な条件はかき消されつつある。

もし、日本をかき乱すことが、どこの国の国益になるとすれば、その国は東京に集中的にミサイルを撃ち込めば、日本はかなりの時間あらゆることがマヒするであろう。

平和は尊いし戦争をすることは愚劣である。しかし、戦争をすることが国益になるとする国があれば、戦争を起こすだろう。北朝鮮は自国の国益に叶うとなれば、ミサイルを用いて東京の機能をマヒさせる能力を持ちつつあるのだ。中国はどの昔からその能力を持つてゐる。

先日の自由民主党の総裁選の討論を聞いていたら、敵基地攻撃能力の可否について、議論があつた。某候補が敵基地攻撃の議論は昭和の議論であると言つていたが、その真意は筆者には理解できない。なぜまた何をもちて昭和の思想とするのであろうか？ 今回の総裁選で、そういう某候補者が総裁に、そして首相に選ばれなくて良かったと思つてゐる。

確かに昭和の米ソ冷戦時代、MAD（核兵器相互確証破壊戦略）の思想があつた。お互いに核を撃ち合つたら相互に完全に破壊されてしまうので、そうならないように自重しようという思想である。

しかし日本が核兵器を打ち込まれた場合、現在の戦略はアメリカに頼るほか日本としての對抗策はない。本当にそれでいいのか。アフガニスタンの事例を見るまでもなく、アメリカも自分の国益を勘案し、不利益だと思えば、今まで肩入れしていた国を見捨てるのである。アフガニスタンと日本ではアメリカの国益や世界情勢上、ウエイトが違うかもしれないが、基本的にアメリカの立場に立つてみると、その時のアメリカの国益上、日本がどのような状態なのかは分からない。

友好国に頼ることは、戦略的に可能であれば有効な手段であるが基本的に自国の安全保障の最終的な保証は自国が責任を持たなければならぬ。

日本が侵略されることで、友好国に救いがたいダメージがあるとすれば、その友好国は日本を応援するであらう。

果たして、今の日本は昔のように不沈空母として今でも地理的に恵まれた国と言えるだろうか。少なくとも、日本がミサイルを撃ち込まれた場合に敵基地反撃能力は必要であり、もしどこかの国が核兵器を使うと日

本を脅した場合は、日本が核反撃能力を持つことは有効な対応であろう。国際情勢はいつどのように変化するかは分からない。日本として、そのような情勢になれば、日本として核武装という選択肢がありますよ、という意思表示ができることと、その技術的裏付けを維持することは重要なことである。

現在の日本防衛の原則は専守防衛である。このような原則が打ち立てられていた時代は、中国の核ミサイルも、ましてや北朝鮮の核ミサイルもなかった時代である。しかし現在は核ミサイルに日本は自ら対処する必要がある。敵基地攻撃能力は必要な時代であり、最小限敵基地を攻撃できる航空機やミサイルそして衛星等のセンサー能力は保有すべきである。専守防衛こそ昭和の議論といえる。

周辺国が核兵器や長射程ミサイルを装備している状況で、日本はただに地理的条件に恵まれているからと安穩としていられる情勢ではないのである。